

## ●グローバル化時代の医療・検査事情 46

世界の医学部を巡って (22)  
V 追加 ヨーロッパ編 オーストリア共和国

な ら のぶ お  
 良 信 雄  
 Nobuo NARA

モーツァルト、ベートーベン、ハイドン、シューベルト、ヨハン・シュトラウス2世、ブラームスなど、世界の誰もが知っている大作曲家が活躍した音楽の都ウィーン。学術面でも、精神分析学者のジークムント・フロイトや、ABO血液型を発見したカール・ラントシュタイナーなど多数のノーベル賞受賞者を輩出しているウィーン大学が1365年に創立されるなど、伝統と格式を誇ってきたオーストリアの医学教育はいかなるものか、かねてから興味があった。しかし、オーストリアの医学部を訪問する機会にはなかなか恵まれなかった。

たまたまヨーロッパ医学教育学会 (The Association for Medical Education in Europe: AMEE) が2011年にウィーン (写真1) で開催されたのに合わせ、ドイツのミュンヘン工科大学医学部を視察した後、その足でザルツブルクとウィーンを訪問することにした。もっとも、ウィーン医科大学は学会主催校として多忙なため、医学部には立ち寄れることが適わなかったが、オーストリアの医学教育の概要に



写真1 ヨーロッパ医学教育学会 (AMEE) 会場

については調査することができた。

オーストリア共和国 (以下オーストリア) は、国土面積が北海道とほぼ同じの約8.4万平方キロメートルで、人口は約892万人である<sup>1)</sup>。日本でもっとも人口密度が低い北海道の人口が約538万人であることを考えれば、オーストリアも比較的ゆとりがあると想像できよう<sup>2)</sup>。9つの州から構成される連邦共和制で、首都はウィーンにあり、全人口の約21.5%にあたる約192万人が暮らしている。ゲルマン系民族が主で、公用語はドイツ語である。宗教はカトリック教信者が約64%、プロテスタントが約5%で、イスラム教が約8%となっている。

歴史的には、紀元前800年頃にハルシュタット文明があったとされる。1273年には現在のスイス領内のドイツ系貴族ハプスブルク家のルドルフ1世が神聖ローマ帝国皇帝 (ローマ皇帝、通称ドイツ皇帝) に選出され、ハプスブルク家繁栄の礎を築いた。以来、ハプスブルク家は次第に勢力を拡張して領土を拡大し、1519年に即位したカール5世の時代にはスペインなども含めて「日の沈まぬ」大帝国となった。

1918年、第一次世界大戦の敗北に伴い、ハプスブルク家最後の皇帝カール1世は亡命した。かくして中央ヨーロッパでおよそ650年間も君臨したハプスブルク帝国は終焉し、その後は共和制が敷かれた。

1938年にオーストリアはナチス・ドイツに併合されたが、1945年、第二次世界大戦敗戦とともにイギリス、アメリカ、フランス、ソ連の4か国によって共同占領された。そして、1955年に連合国との国家条約が締結されて独立を回復し、永世中立国として国連に加盟した。1995年1月にはヨーロッパ

連合（EU）に加盟し、現在に至っている。

## I. 教育制度

オーストリアの義務教育は、日本と同じく9年間で、教育体系は図1のように構成されている<sup>3,4)</sup>。幼稚園で3～5歳児を対象にした就学前教育が行われ、5歳児は、週に4日以上にわたって、合計16時間以上就園することも義務付けられている。

初等教育は、6歳から国民学校に入学し、4年間で行われる。

中等教育は、10歳から新中等学校（従来のハウプトシューレ）か普通上級学校（従来のギムナジウム、実務科ギムナジウム、経済系実務科ギムナジウムの総称）で4年間の教育が行われる。新中等学校には、修了後に全日制または定時制の職業教育学校に進む希望者が主に就学する。普通上級学校には、

大学など高等教育への進学を目指す者が主に就学し、4年間の教育後に修了試験が行われ、合格者には大学への入学資格が与えられる。

なお、新中学校修了後の教育機関として、職業基礎資格を取得するための全日制中級職業教育学校（修業年限1～4年）、特定分野の専門職や中級技術者の養成を目的とした上級職業教育学校（修業年限5年）、1年間の普通教育と職業準備教育を行うポリテクニック、それに続く定時制の職業学校（デュアルシステム、修業年限2～4年）などのコースがあり、学生の能力や適性などに応じて選択される。上級職業教育学校の修了者は、大学入学資格の取得が可能になっている。

高等教育は、総合大学や専門大学で行われ、ボローニャプロセスに準拠している<sup>5)</sup>。すなわち、ヨーロッパに共通する学位として、3～4年間の教育で学士、さらに1～2年間の教育で修士が、3年間の教育で

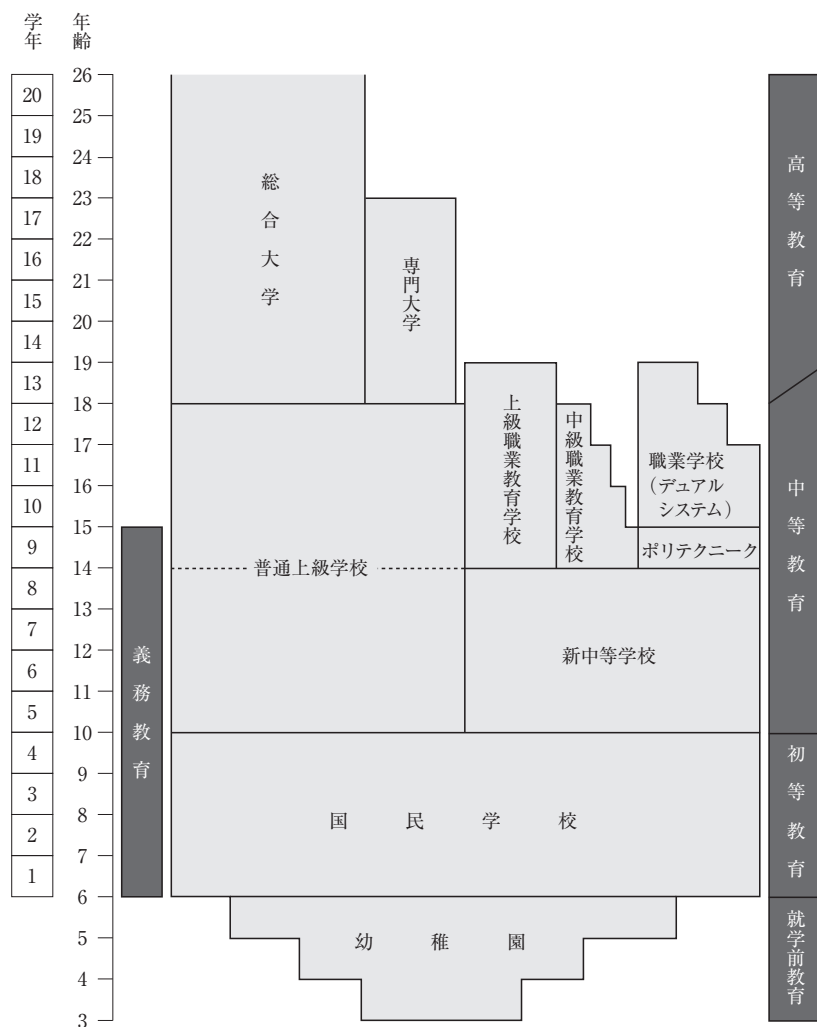


図1 オーストリアの教育体系

博士が取得できる。

## II. 医療制度

オーストリア人の平均寿命は、2020年現在、81.30歳（男性78.90歳、女性83.60歳）で、長寿国である<sup>6)</sup>。病床数は人口千人当たり7.190床で、日本の12.840床よりも少ないが、平均在院日数は6.300日で、日本の16.000日よりも短く、病床回転が早い。医師数は人口千人当たり5.360人で、日本の2.490人を上回る。医学部卒業者も人口10万人あたり13.990人となっており、日本の6.990人よりも多い。国土面積を考慮しても、医師は充足されていると思われる。

オーストリアには日本と同じく、健康保険への加入が義務づけられており、私立病院を除けば、基本的に診察費と治療費の自己負担はない<sup>7)</sup>。

医療機関には診療所と病院がある。診療所には主に一般医が担当する一般診療所と、専門医がいる専門科診療所（小児科、耳鼻咽喉科、眼科、婦人科など）がある。病院には大学病院、公立病院、私立病院がある。病院や各科の専門医は予約制になっているが、一般診療所では予約を取っていない所もある。

病院の救急外来は24時間受け付けているが、救急患者以外は、まず一般医を受診する。そして、対応できない場合には公立病院を紹介される仕組みである。私立病院では、数人のスタッフを除けば、病院と契約している専門医が時間を決めて担当患者の診療を行っている。予約制のため公立病院よりも待ち時間が短く、検査も柔軟に対応してもらえる利点がある。もっとも、私立病院での診察料、治療費等は病院や医師によって異なり、高額を負担しなければならない<sup>8)</sup>。

## III. 医学部

オーストリアには、公立医学校が4校、私立医学校が3校ある<sup>9)</sup>（表1）。もっとも歴史が古く、かつ最大規模の医学部は1365年にウィーン大学に設置された。ウィーン大学は、カレル大学、ハイデルベルク大学とともに神聖ローマ帝国によって創立された古い大学で、クレクアレリ・シモンズ社の「QS世界大学ランキング2022年版」によると、ウィーン大学のランキングは世界151位である<sup>10)</sup>。ただし、ウィーン大学医学部は2004年にウィーン医科大学（Medizinische Universität Wien）として分離され、現在に至っている<sup>11)</sup>。

多くの医学部、医科大学では歯学科が併設されているが、本稿では医学部に特化した内容を紹介したい。

医学部への入学においては、公立医学校では7月上旬に実施される共通の入学試験（MedAT: Aufnahmeverfahren Medizin）<sup>12)</sup>が課され、私立医学校ではそれぞれで入学者選抜が行われる。入学定員はウィーン医科大学の610名を始め、公立大学では多く、私立医学校の定員数は少ない。

なお、パラセルサス医科大学（Paracelsus Medizinische Privatuniversität）では75名定員の他に、隣国ドイツのニュルンベルクに分校があり、50名の学生を受け入れている<sup>13)</sup>。ジークムント・フロイト私立大学（Sigmund Freud Privatuniversität）の入学定員は確認できなかったが、2021年の3年次修了生（学士号取得）は歯学科も含めて164名となっている<sup>14)</sup>。概してヨーロッパの医学校では入学者数と3年次修了者数、6年次卒業者数は乖離しており、参考程度にとどめていただきたい。

ウィーン医科大学はヨーロッパのトップ15の医

表1 オーストリアの医学校

医学校名	所在地	公私立別	創設年	年限	使用言語	入学定員
Johannes Kepler Universität Linz Medizinische Fakultät	リンツ	公立	2014	6年	独語	310
Karl Landsteiner Privatuniversität für Gesundheitswissenschaften	クレムス	私立	2013	6年	独語、英語	70
Medizinische Universität Graz	グラーツ	公立	1863	6年	独語	346
Medizinische Universität Innsbruck	インスブルック	公立	1670	6年	独語	370
Medizinische Universität Wien	ウィーン	公立	1365	6年	独語	610
Paracelsus Medizinische Privatuniversität	ザルツブルク	私立	2003	5年	独語、英語	75
Sigmund Freud Privatuniversität Medizinischen Fakultät	ウィーン	私立	2015	6年	独語	3年次終了生 164(2021年)

学部にリストされるオーストリア随一の医学校で、大学院生や歯学部生などを含め、約 7,500 人の学生が在籍している。教員は約 1,200 名、職員は約 8,870 名である<sup>14)</sup>。大学附属病院には 30 診療科、2 臨床研究所、12 の研究施設がある。2020 年のデータでは、ベッド数が 1,734 床で、入院患者は 59,454 人、平均在院日数 5.9 日、外来患者は 1,022,652 人、一日平均外来患者数は約 4,000 人となっている<sup>15)</sup>。

#### IV. 医学教育

一学年は 2 セメスター制で、合計 12 セメスターが 6 年間で教育される。履修単位は、EU に共通した欧州単位互換制度 (European Credit Transfer and Accumulation System: ECTS)<sup>16)</sup> 単位に換算し、1 セメスターが 30 ECTS 単位、6 年間 12 セメスターの教育で合計 360 ECTS が取得できる。卒業すると Dr. med. univ. の学位が授与される。

代表的なカリキュラムとして、ウィーン医科大学のカリキュラムを提示する (表 2)<sup>17)</sup>。ブロック制で、基礎医学教育に続き、臓器別、診療科別に教育が行われる。臨床技能教育や、課題解決型学修 (Problem-oriented learning: PBL)、症例基盤型学修、客観的臨床能力評価 (Objective structured clinical examination: OSCE) など、国際標準の教育技法が導入されている。研究活動や、学士論文作成も行われている。臨床実習は、大学附属病院で内科実習 16 週、外科実習 16 週を始め、脳神経内科、精神科、産婦人科、小児科、救急および集中診療科などの診療科実習が各 5 週で実施されている。なお、ドイツやオーストリアに特有のクリニカルクラークシップ制度として、ファミラートル (Famulatur) が 12 週間実施される。

オーストリアは、医師免許と専門医資格が相互承認されている欧州経済領域 (European Economic Area: EEA) に加盟しているため、オーストリアの医師免許は EEA 加盟国内で有効である<sup>18), 19)</sup>。

#### V. オーストリア紀行

ヨーロッパの魅力を一度に楽しみたい。そんな願望を満たしてくれる国の一つがオーストリアだ。魅力あふれる国なのに、意外と知名度は高くないのか、

ウィーン市内で見かけた T シャツには、「No Koala in Austria !」とプリントされていた。日本語で一字だけ多い国の方が有名なのかもしれない。オーストリアでは、音楽のほか、ハプスブルグ家栄光の軌跡、アルプスやバツハウ渓谷などの大自然、ワイン、コーヒーにスイーツなど、歴史と文化をまるごと堪能できる。

ミュンヘン工科大学医学部での視察調査を終え、ミュンヘンからオーストリア連邦鉄道が運行する Eurocity (EC) に乗ってザルツブルクに到着した。ヨーロッパの鉄道は、時間にルーズな点があることさえ我慢すれば、静かで、車窓から眺める景色も良く、快適な旅が楽しめる。体格が立派なヨーロッパ人仕様のゆったりしたシートのため、小さな日本人にはこの上なく快適だ。

ザルツブルクはドイツとの国境に近く、約 1 時間半で到着した。「塩の城」という意味の Salzburg が示すように、周囲の岩塩鉱から産出される塩の取引で繁栄してきた都市である。ビアレストランを兼ねたビール会社が経営するホテルに泊まり、美味しいビールとして世界で 3 本指に入るビールと郷土料理に舌鼓を打った (写真 2)。市内バスが乗り放題で、博物館や観光スポットにも無料で入場できるザルツブルクカードを購入して、市内を見物した。

まずは、ザルツブルクのシンボルともされるホーエンザルツブルク城へ。ザルツァッハ川沿いのメンヒスベルク丘にそびえ立ち、旧市街から見ても存在感がある (写真 3)。1077 年から着工し、17 世紀に現在のような建物になったという。広いレジデンス広場を越えてケーブルカーで城に登った。城内には、大司教の居室や諸部屋、囚人を閉じ込めた拷問具の



写真 2 ザルツブルク宿泊ホテルのビアレストラン

表2 ウィーン医科大学カリキュラム

ブロック1: 健康と患者 (3週)	ブロック2: 人体解剖学 (6週)	ブロック3: 細胞生物学 (6週)	総括試験 1a	ブロック4: 生理学(5週)	ブロック5: 遺伝学、 細胞情報伝達 (3週)	ブロック6: 環境と人間 (3週)	総括試験 1b
社会的能力 救急処置、課題解決型学修 (PBL)			進級試験 2	身体診察学 課題解決型学修 (PBL)			総括試験 2
ブロック7: 科学と医学 (3週)	ブロック8: 病態生理学 (6週)	ブロック9: 症候学、治療学総論 (6週)		ブロック10: 内分泌・ 代謝学 (3週)	ブロック11: 循環器学、血液学、 脈管学 (5.5週)	ブロック12: 呼吸器学 (3週)	
基本的診療技能、医療面接A 課題解決型学修 (PBL)			進級試験 3	身体診察 症例基礎型学習、器官形態学 I			総括試験 3
ブロック13: 栄養学、 消化器学 (4週)	ブロック14: 腎、 酸塩基平衡 (3週)	ブロック15: 生殖器、出産、 妊娠、分娩 (4週)		ブロック17: 医学研究 (必須、選択)(3週)	ブロック19: 脳、神経系 (5週)	ブロック18: 皮膚、 感覚器 (4週)	
課題研究 I、救命救急処置 I 症例基礎型学習、器官形態学 II			総括試験 4a	神経学的所見、医療面接B 器官形態学 III			総括試験 3
ブロック22/23: 公衆衛生学 (5週)	ブロック21: 運動、 疼痛 (3週)	ブロック25: 外科総論		ブロック20: 健康および病的状態での 精神活動、医療面接C (5週)	ブロック24: 課題研究(6週)		
ブロック27: 内科学 専門的診断技能、課題研究 II、基本的超音波検査手技			進級試験 5	課題研究 II、救命救急処置 II 客観的臨床能力試験 (OSCE)			総括試験 5a
脳神経内科実習 (5週)	精神科実習 (5週)	小児科実習 (5週)		産婦人科実習 (5週)	眼科 (2か5週)、 耳鼻咽喉科 (2か5週)	救急および集中治療科実習 (5週)	
診療科横断症例検討会 研究演習			総括試験 5a	診療科横断症例検討会 研究演習			総括試験 5a
内科診療実習 (16週)				外科診療実習 (16週)			
						卒業試験	

ある部屋、市内に向けた大砲などがあり、オーディオガイド片手にザルツブルクの歴史に触れることができた。展望台からはザルツブルクの美しい街並みを眺められる（写真4）。

ザルツブルクはアマデウス・モーツァルトが生まれた町として有名だ。ホーエンザルツブルク城を後にして、観光客で賑わうゲトライデガッセを進んでいくと、黄色の壁に Mozarts Gebrutshaus と書かれた建物が目に入った（写真5）。モーツァルトはこの建物の4階で誕生した。17歳まで過ごしたとされ、モーツァルトが使用した楽器や、自筆の楽譜などが展示されている。

さらに外せないのがミラベル宮殿（写真6）。1606年に大司教が建設し、1818年に再建されたそうで、現在は市役所や図書館として利用されている。建物内には大理石の間であるマルモアザールと豪華なホールがあり、大理石の装飾と天使像で飾られた天使の階段を上って見学できる。宮殿の前には美しい庭園があり、映画「サウンド・オブ・ミュージック」

の舞台にもなったことで有名だ。つい「エーデルワイス♪♪」と口ずさんでしまうのは僕だけだろうか？

こぢんまりとした旧市街には、大司教の宮殿であるレジデンツ、大聖堂、ザルツブルク音楽祭の主会場になる祝祭劇場、モーツァルト広場に立つモーツァルト像など、見所は多い。

ザルツブルクからは車で世界遺産ハルシュタットへ。紀元前1,000～500年頃にケルト人が豊富な岩塩を求めて移住して採掘していた。ただ、その後に移住してきたゲルマン人が、その上前を刎ねていたという悲しい歴史を現地で聞いた。ちなみに、ハルとはケルト語で塩、シュタットは都市の意味だそう。アルプスを望む湖に面した町の雰囲気は絵はがきさながらだ。教会を中心に、湖に沿った町並みが美しく、湖面に投影されている。生憎の雨だったが、美しい景色は十分に楽しめた（写真7）。

船着き場から坂道を上って行くと、家々のベランダや窓際には、花壇が飾られ、あたたかもスイスのよ



写真3 ザルツァッハ川を臨む  
ホーエンザルツブルク城塞



写真5 モーツァルト生家



写真4 ザルツブルク城塞からの市内眺望



写真6 ミラベル宮殿

うだ。店先では「エーデルワイス」の花苗までも販売されていた。ハルシュタット文明時代の出土品を展示している博物館や、約1,000個の頭蓋骨を並べている納骨堂は長い歴史を感じさせる。裏山には世界最古の塩坑があり、ケーブルカーで登ることができる。坑内は木製の滑り台で降りていくスリル満点な仕掛けで、観光客に人気があるが、時間が足りず、残念ながら体験できなかった。

ザルツブルクからは特急 Railjet に乗り込んで、約2時間半かけてウィーンに向かった。次々と車窓に現れる中央アルプスの山並み、牧草地帯、湖などを飽きることなく眺めているうちに、ウィーン西駅に到着した。

ウィーンでは、ザッハトルテで有名なホテルザッハーではなく、予算の都合で隣のホテルに泊まった。とはいえ、1912年に創業した老舗のホテルで、いかにもヨーロッパ調の重厚な建物であった。国立オペラ座にも徒歩2分と近く、早速にオペラ座のチケットを購入した。あいにくオペラは7月と8月は国外公演で外遊中で、代わりに「モーツァルト楽団」

がコンサートを開催していた。

オペラ座は1869年に建設されたルネッサンス様式の荘厳な建物で、パリ、ミラノと並んでヨーロッパ三大オペラ劇場と称され(写真8)、マーラー、カラヤンなどの巨匠がタクトを振った。劇場前の歩道には、有名音楽家のネームプレートが刻まれ、あたかもアメリカハリウッドスターの銘板を思い起こさせる(写真9)。

劇場に入ると、豪華な階段や彫像が出迎えてくれる(写真10)。モーツァルトコンサートに因んで、指揮者、楽団員、そして案内員も、モーツァルト時代よろしく、銀髪のカツラに当時の衣装で身を固めていた。幸運にも2階の正面バルコニー席が予約でき、なんと舞台の真正面だった(写真11)。オペラであればさぞかし素晴らしかるうが、コンサートでも補って余りある。たまたまその後映画「ミッション・インポッシブル」でも舞台(文字通り!!)になり、イーサン・ハントの気分になった。

コンサートでは、「フィガロの結婚」、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」など、有名なモーツァ



写真7 ハルシュタット



写真9 歩道敷石のマーラーのネームプレート



写真8 国立オペラ座



写真10 オペラ座内部

ルトの楽曲が演奏され、聴衆からは喝采の嵐。締めはウィーン恒例の「ラディスキー行進曲」で、客席を振り向いた指揮者のタクトに合わせて客も一斉に手拍子を取り、否が応でも盛り上がった。

さて、ウィーンではハプスブルク家の栄光を偲ぶことができる。オペラ座からほど近くにホーフブルク王宮がある。広い敷地の中に18の棟が入り組んで建っており、2,500以上もの部屋がある（写真12）。ミヒャエル広場から入ると、皇帝と皇妃エリザベート（愛称シシィ）の部屋が残っているシシィ博物館がある。博物館内にはエリザベートのドレスや小物のほか、美形を保つために使用した運動器具なども展示されている。宝物館には、贅をつくした財宝がこれ見よがしに陳列されている。目もくらむほどの宝石でちりばめられた冠などがあり、ケタ違いの財力と権力にはタジタジだった（写真13）。

圧巻は、世界で最も美しい図書館と称される王宮図書館だ。18世紀前半に建てられたバロック建築で、現在は国立図書館になっている。入り口は、イ

ギリスの首相官邸と同様に何の変哲もないが、いざ図書館内に入ると、豪華な大広間（プルンクザール）が待ち構えている。奥行き約80メートル、高さ約20メートルで、中央の丸天井は、宮廷画家ダニエル・グランの華麗なフレスコ画で飾られている（写真14）。巨大な神殿に迷い込んだインディ・ジョーンズのような気分になる。

1501年から1850年までの書物が200,000冊以上も所蔵され、宗教改革者マルティン・ルターの蔵書も多数収められている。また、8つの分野にわたって、パピルス、肉筆文書、地図、音楽、チラシ、ポスターなど、特別コレクションも保管されている。ガラスケースの中には、1,400年代の古い本や、1525年の楽譜なども陳列されている。図書館というものの、博物館の雰囲気だ。

ウィーン市内の中心部は「リンク」と呼ばれる環状道路で囲まれており、路面電車を利用すれば主な観光スポットを短時間で効率よく楽しめる。ゴシック様式のシュテファン寺院（写真15）、ペーター教



写真11 オペラ座でのコンサート開演前



写真13 宝物館のきらびやかな冠



写真12 ハプスブルク家の王宮中庭に立つ  
フランツ2世像



写真14 国立図書館プルンクザール



会、国会議事堂、市庁舎（写真 16）、ウィーン大学、博物館、ウィーン・フィルの本拠である楽友協会など、荘厳な建物を見飽きることなく観賞できる。1862年に開園した市立公園には、金色のヨハン・シュトラウス2世、シューベルト、ブルックナーなどの像があり、市民の憩いの場になっているようだ。

ウィーンで見落とせないのが、世界遺産シェーンブルン宮殿だ。17世紀初頭、皇帝マティアスが狩猟を行っていた森に美味しい水が湧き出る「美しい（Schöner）泉（Brunnen）」を発見したことが、「シェーンブルン」の由来になっている。その後、神聖ローマ皇帝レオポルト1世が新しい宮殿の建設を計画した。当初はフランス王権に負けてなるものかと向こうを張り、ヴェルサイユ宮殿の規模を凌ぐ宮殿が企図された。しかし、財政難には勝てず、計画は縮小せざるを得なかった。そして、1743年に女帝マリア・テレジアによって今日のような宮殿が建設された。マリー・アントワネットを始め、ハプスブルク家が離宮として利用していたが、盛者必衰の教えの通り、1918年に最後の皇帝カール1世が

宮殿で退位文書にサインして、共和国に移譲された。

宮殿は幅約175メートル、奥行き55メートルのバロック様式の荘厳な建物だ。1441室もの部屋があり、約1,000人も侍従や使用人が住んでいたという（写真 17）。部屋の多くはロココ様式できらびやかに装飾され、ガイドツアーで見学できる。宮殿の南側にある庭園は、東西約1.2km、南北約1kmという途方もない広さで、フランス式庭園らしい幾何学模様の花壇、アーチ型の生け垣、ネプチューン噴水池、動物園などがあり、日本庭園もある。

南端の小高い丘には、1775年に、対プロイセン戦の勝利と戦没者慰霊のために建てられたギリシャ回廊建築の記念碑グロリエツェがある（写真 18）。長さは100メートルもあり、そこから眺めるウィーン市街は素晴らしい。

折角のウィーン。「美しき青きドナウ」を満喫すべく、1時間ほどかけてドナウ川流域のバッハウ渓谷へ出かけた。まずはドナウ川クルーズの起点にもなっているメルクへ。ここには11世紀に建てられ、18世紀に改築されたバロック様式の美しいベネディクト派の修道院がある（写真 19）。修道院内部



写真 15 シュテファン寺院



写真 17 シェーンブルン宮殿



写真 16 市庁舎



写真 18 シェーンブルン宮殿のグロリエツェ

には、天井に美しいフレスコ画が描かれた豪華絢爛な教会や、約10万冊の蔵書と多数の手書き本を収めた図書館もある（写真20）。修道士はここで黙々と修行に励んだのだろう。

メルクからは遊覧船に乗船し、岸辺の古城や修道院、斜面を利用したブドウ畑などを眺めつつ1時間ほど遊覧を楽しんだ。バッハウ渓谷で最もロマンティックとされるデュルンシュタインで下船した。中世の街並みが残り、あたかもおとぎ話の国に迷い込んだかの錯覚にすら陥る。

市内からは山の上に立つケーニンリンガー城跡を目指した。キツイ登り坂を息を弾ませながら登ったが、山頂に立つと風が心地よく、滔々と流れるドナウ川と町並みを一望できる（写真21, 22）。イギリスのリチャード1世を幽閉していたというが、強者どもが夢のあとで、現在はゴツゴツした岩が残っているだけだ。アプリコットが名産で、土産物店でジャムを購入した。昼食はワイン酒場のホイリゲで、ジョッキ型グラスで自家製の白ワインとサンドイッチを楽しんだ。

談笑の場といえば、スコットランドやアイルランドならパブだが、ウィーンではカフェでのコーヒーとスイーツが定番だろう。もっとも、どちらかと言えば左利きの僕にとっては団子よりワイン。ウィーン市内には洞窟風のワインセラーレストランがあり、白ワイン片手にオーストリア名物のシュテルツェ（ドイツバイエルン地方のシュバイネハクセと同じ）を味わった（写真23, 24）。骨付き豚すね肉を皮がカリカリになるまでローストしたもので、マスタード、ホースラディッシュ、唐辛子などが添えられている。ワインはミネラルウォーターよりも安く、水代わりにワインをグビグビ。いくら美味しいとはいえ、高脂血症と痛風が心配だ。

帰国する当日午前、隣のザッハホテルに立ち寄って有名なザッハトルテを土産に購入した。さすがに美味しく、甘党の家族からは大好評であった。

## おわりに

今回で「世界の医学教育の事情」の連載をひとま



写真19 メルク修道院



写真21 バッハウ渓谷クルーズ

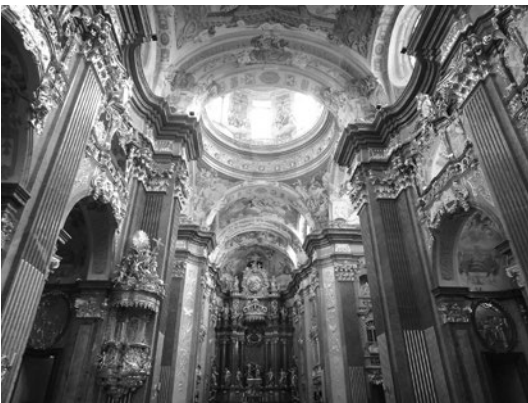


写真20 修道院内部



写真22 デュルンシュタインにあるケーニンリンガー城跡



写真 23 洞窟のようなレストランでワインをいただく



写真 24 オーストリア料理シュテルツェ

ず終了させていただきます。

ロシア、中央アジア、南アメリカ、アフリカなど、調査できていない国は多い。2016年に折角招待されたサウジアラビアへの出張は、あいにく急性肝炎で倒れてしまい、断念を余儀なくされた。ほかの国への調査も、2019年からパンデミックになったCOVID-19の煽りを受けて実現できないままである。いずれ機会が到来すれば、残っている国を訪れ、読者に情報をお届けしたいと思う。それまで、しばしお休みとさせていただきます。

長い間のご高読に厚く御礼申し上げます。再見!!

## 文 献

- 1) 外務省基礎データ  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/austria/data.html>  
 アクセス2022年1月21日

- 2) 北海道データブック2021  
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tkk/databook/70715.html> アクセス2022年1月21日
- 3) 文科省資料  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afildfile/2017/10/02/1396864\\_010.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afildfile/2017/10/02/1396864_010.pdf) アクセス2022年1月21日
- 4) 田中達也：オーストリア連邦共和国の教育制度の概要。佛教大学教育学部学会紀要8：83-5, 2009
- 5) Oliver R, Sanz M: The Bologna process and health science education: times are changing. Med Educ 2007; 41: 309-317
- 6) OECD資料  
<https://data.oecd.org/health.htm> アクセス2022年1月21日
- 7) せかいじゅうライフ  
<https://sekai-ju.com/life/aut/life/austria-insurance/>  
 アクセス2022年1月21日
- 8) 外務省資料：世界の医療事情  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/europe/austria.html> アクセス2022年1月21日
- 9) 世界医学教育連盟資料  
<https://www.wdoms.org/> アクセス2022年1月21日
- 10) QS世界ランキング2022  
<https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2022> アクセス2022年1月21日
- 11) ウィーン医科大学ウェブサイト  
<https://www.meduniwien.ac.at/web/> アクセス2022年1月21日
- 12) MedAT  
<https://www.medizinstudieren.at/> アクセス2022年1月21日
- 13) パラセルサス医科大学ウェブサイト  
<https://www.pmu.ac.at/> アクセス2022年1月21日
- 14) ジークムント・フロイト私立大学ウェブサイト  
<https://med.sfu.ac.at/de/> アクセス2022年1月21日
- 15) ウィーン医科大学附属病院資料  
<https://www.akhwien.at/> アクセス2022年1月21日
- 16) 欧州高等教育教育圏ウェブサイト  
<https://education.ec.europa.eu/> アクセス2022年1月21日
- 17) ウィーン医科大学カリキュラム  
[https://www.meduniwien.ac.at/web/fileadmin/content/serviceeinrichtungen/studienabteilung/studium/Humanmedizin/2018\\_09\\_12\\_Curr\\_Human\\_Kons\\_Fassung\\_clean.pdf](https://www.meduniwien.ac.at/web/fileadmin/content/serviceeinrichtungen/studienabteilung/studium/Humanmedizin/2018_09_12_Curr_Human_Kons_Fassung_clean.pdf) アクセス2022年1月21日
- 18) EEAウェブサイト  
<https://www.eea.europa.eu/> アクセス2022年1月21日
- 19) 医師免許互換制度  
<http://www.interq.or.jp/tokyo/ystation/medical3.html>  
 アクセス2022年1月21日